

【D年】聖霊降臨節第23主日(2024年10月20日)

【旧約聖書日課】エレミヤ書 29章1節、4～14節

以下に記すのは、ネブカドネツアルがエルサレムからバビロンへ捕囚として連れて行った長老、祭司、預言者たち、および民のすべてに、預言者エレミヤがエルサレムから書き送った手紙の文面である。²それは、エコンヤ王、太后、宦官、ユダとエルサレムの高官、工匠と鍛冶とがエルサレムを去った後のことである。³この手紙は、ユダの王ゼデキヤが、バビロンの王ネブカドネツアルのもとに派遣したシャファンの子エルアサとヒルキヤの子ゲマルヤに託された。

「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、エルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に告げる。⁵家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。⁶妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならない。⁷わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。

⁸イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなたたちのところにいる預言者や占い師たちにだまされてはならない。彼らの見た夢に従ってはならない。⁹彼らは、わたしの名を使って偽りの預言をしているからである。わたしは、彼らを遣わしてはいない、と主は言われる。

¹⁰主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。¹¹わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であつて、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。¹²そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。¹³わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求めらば、¹⁴わたしに出会うであろう、と主は言われる。わたしは捕囚の民を帰らせる。わたしはあなたたちをあらゆる国々の間に、またあらゆる地域に追いやつたが、そこから呼び集め、かつてそこから捕囚として追い出した元の場所へ連れ戻す、と主は言われる。

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 3章7～21節

しかし、わたしにとって有利であつたこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。⁸そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、⁹キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。¹⁰わたしは、キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかつて、その死の姿にあやかりながら、¹¹何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

¹²わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。¹³兄弟たち、わたし

自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、¹⁴神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。¹⁵だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにしてくださいませ。¹⁶いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。

¹⁷兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。¹⁸何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。¹⁹彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。²⁰しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。²¹キリストは、万物を支配下に置くことのできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 17章13～26節

¹³しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。¹⁴わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していません。¹⁵わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。¹⁶わたしが世に属していないように、彼らも世に属していません。¹⁷真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。¹⁸わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。¹⁹彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。

²⁰また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。²¹父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。²²あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。²³わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。²⁴父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。²⁵正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。²⁶わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになるためです。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 29章1節、4～14節

1次に記すのは、ネブカドネツァルがエルサレムからバビロンへ捕囚として移した、生き残っている長老たち、祭司たち、預言者たち、およびすべての民に、預言者エレミヤがエルサレムから書き送った手紙の言葉である。

4「イスラエルの神、万軍の主は、私がエルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に、こう言われる。5家を建てて住み、果樹園を造って、その実を食べなさい。6妻をめとって息子、娘をもうけ、息子には妻を迎え、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そこで増えよ。減ってはならない。7私が、あなたがたを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があってこそ、あなたがたにも平安があるのだから。

8イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなたがたのうちにいる預言者や古い師たちにだまされてはならない。あなたがたのために夢を見る〔直訳→あなたがたが夢を見させている〕夢占い師に耳を傾けてはならない。9彼らは、私の名を使ってあなたがたに偽りの預言をしているからである。私は彼らを遣わしてはいない——主の仰せ。

10主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたらすぐに、私はあなたがたを顧みる。あなたがたをこの場所に帰らせるという私の恵みの約束を果たす。11あなたがたのために立てた計画は、私がよく知っている——主の仰せ。それはあなたがたに将来と希望を与える平和の計画であって、災いの計画ではない。12あなたがたが私を呼び、来て私に祈るならば、私は聞く。13私を捜し求めるならば見いだし、心を尽くして私を求めるならば、14私は見いだされる——主の仰せ。私あなたがたの繁栄を回復する〔別訳→捕らわれ人を帰らせる〕。あなたがたをあらゆる国々に、またあらゆる場所に追いやったが、そこからあなたがたを集める——主の仰せ。

フィリピの信徒への手紙 3章7～21節

7しかし、私にとって利益であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。8そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに私はすべてを失いましたが、それらを今は屑と考えています。キリストを得、9キリストの内にいる者と認められるためです。私には、律法による自分の義ではなく、キリストの真実〔別訳→キリストへの信仰〕による義、その真実〔別訳→信仰〕に基づいて神から与えられる義があります。

10私は、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、11何とかして死者の中からの復活に達したいのです。12私は、すでにそれを得たというわけではなく、すでに完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスによって捕らえられているからです。13きょうだいたち、私自身はすでに捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向け

つつ、14キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。15だから、完全な者は誰でも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたが何か別の考え方をしているなら、神はそのことも明らかにしてくださいませ。16いずれにせよ、私たちは到達したところに基づいて進みましょう。

17きょうだいたち、皆一緒に私に倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、私たちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。18何度も言ってきましたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架の敵として歩んでいる者が多いのです。19彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹〔別訳→下腹部〕を神とし、恥ずべきものを誇りとし、地上のことしか考えていません。20しかし、私たちの国籍〔直訳→市民権〕は天にあります。そこから、救い主である主イエス・キリストが来られるのを、私たちは待ち望んでいます。21キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、私たちの卑しい体を、ご自身の栄光の体と同じ形に変えてくださるのです。

ヨハネによる福音書 17章13～26節

13しかし今、私は御もとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのには、私の喜びが彼らの内に満ち溢れるようになるためです。14私は彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。私が世から出た者でないように、彼らも世から出た者ではないからです。15私がお願いするのは、彼らを世から取り去るのではなく、悪い者から守ってくださることです。16私が世から出た者でないように、彼らも世から出た者ではありません。17真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの言葉は真理です。18私を世にお遣わしになったように、私も彼らを世に遣わしました。19彼らのために、私は自らを聖なる者とします。彼らも、真理によって聖なる者とされるためです。

20また、彼らについてだけでなく、彼らの言葉によって私を信じる人々についても、お願いします。21父よ、あなたが私の内におられ、私があるの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らも私たちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたが私をお遣わしになったことを信じるようになります。22あなたがくださった栄光を、私は彼らに与えました。私たちが一つであるように、彼らも一つになるためです。23私が彼らの内におり、あなたが私の内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたが私をお遣わしになったこと、また、私を愛されたように、彼らをも愛されたことを、世が知るようになります。24父よ、私に与えてくださった人々を、私のいる所に、共にいるようにしてください。天地創造の前から私を愛して、与えてくださった私の栄光を、彼らに見させてください。25正しい父よ、世はあなたを知りませんが、私はあなたを知っており、この人々はあなたが私をお遣わしになったことを知っています。26私は彼らに御名を知らせました。また、これからも知らせます。私を愛してくださったあなたの愛が彼らの内にあり、私も彼らの内にいるようになるためです。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・10月20日「聖霊降臨節第23(最終)主日」の日課主題は「天国に市民権をもつ者」。

・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、エレミヤがバビロンに捕囚された人々に向けて記した書簡とされる箇所前半部。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、パウロ自身のキリスト信者としてのあり方が証しとして記される箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスの「大祭司の祈り」と呼ばれる祈りの後半部分。

旧約日課(エレミヤ 29 章より)

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第二に置かれた預言文書。紀元前7世紀後半から6世紀初頭まで、南王国ユダが減んでいく時代に王国の宮廷預言者として活動した「エレミヤ」の預言活動と預言句集を集成した文書。前半部が概ね時代順に配置されているのに対して、後半部は時代順によらずに配置されている箇所が多々見られ、編集過程における混乱が推認される。本書の最終章(52章)は、「列王記下」の末尾(24:18~25:20)と重複する記事であり、「列王記」をはじめとする「前の預言者」を編集した者との強い関係性がうかがわれる(「イザヤ書」にも同様の関係性を示唆する箇所がある。イザヤ 36~39章と王下 18:13~20:19)。

・「預言者エレミヤ」の活動時期は、冒頭標題に明示されており(1:2~3)、それによれば、前628年ごろから前587年頃までとなるが、それ以後の時代の出来事を伝える箇所もある(40~44章など)。「エレミヤ」は、ヨシヤ王の時代(在位=前640~609年頃)に、地方聖所の祭司の家系でありながらエルサレム宮廷に登用された宮廷預言者。当時の覇権国アッシリアの急速な衰退という時代変化の中、新興の覇権国バビロニアとの同盟関係に舵を切ったヨシヤ王の下で進められた改革の担い手として各地から招集された一人であったと推認される。ヨシヤ王の戦死後、王国はアッシリアの後継を自認するエジプトと新興バビロニアとの間で揺れ動き、宮廷内も親エジプト派と親バビロニア派に割れて対立することになった、これに対して、バビロニア王国二代ネブカドネツアル王のもとで第一次捕囚がなされ、ヨヤキン王(=エコンヤ王)と共に親バビロニア派の多くがバビロンに移され、エルサレムのユダ宮廷は親エジプト派が主流を占めるようになった。エレミヤは、親バビロニア派であったがエルサレムに残留し、非主流派として主流派と対峙しながら、エルサレム陥落、王国滅亡の時代を迎えた。

・日課箇所は、第一次バビロン捕囚(前598年頃)から数年後、おそらくエルサレムのユダ宮廷がゼデキヤ王のもとでバビロニアとの関係を絶ちエジプトとの関係強化に舵を切り始めた時期に、バビロン移住組に向けて発信された書簡として伝えられている。移住組

の中には、親エジプト派(=反バビロニア派)も含まれていたと考えられ、特に「預言者や占い師」の中に多かったと推認される。それに対して、親バビロニア派の立場からエレミヤは、バビロン移住(捕囚)を肯定的に受け入れるように強く勧め、また移住を否定的に考える者らには将来の帰還という希望を告げている。

・日課箇所の直後、15節「あなたたちは、『主が我々のために、バビロンでも預言者を立ててくださった』と言っている」という記述は、「エゼキエル書」の預言者エゼキエルのような者を指していると推察される。エレミヤは、王に助言する宮廷預言者という立場から、バビロンの捕囚王「エコンヤ王(=ヨヤキン王)」に、同地で新たに適当な(親バビロニア派の立場の)「預言者」を任命するように助言していたのかもしれない。

・「バビロン捕囚」は、しばしば「捕囚の七十年」と呼ばれるが、その根拠は、日課箇所10節の記述にある。これを事後的に厳密に適用すると、ペルシア王キュロスによる解放が前538年として、「捕囚」は前608年頃から始まったことになる。これは、ヨシヤ王が対エジプト戦役で戦死(前609年)、王国が混乱に陥った時期に重なる。他方で、第一次捕囚(前598年頃)を起点とするならば、「捕囚」からの解放は前528年頃となり、ペルシア王キュロスによる解放より10年遅れる。もともと、このような推論は「70年」に関する記述が編集者による事後的な加筆であると考えてなされるものであり、そもそもエレミヤが「預言」として象徴的に告げていることを考慮すれば、厳密な「捕囚」の期間としての70年を確定することは無意味かもしれない。

使徒書日課(フィリピ 3 章より)

・「フィリピの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第6に置かれた書簡文書。本書に関する執筆背景などは、二週前の資料「聖書と祈り 241002」を参照。

・パウロは、日課箇所の前段 4~6 節で自らの経歴が「キリスト・イエスを誇り」とせずとも「肉の誇り」を語ることのできるものであると述べ、その上で、日課箇所においては「キリストを誇り」とする自らのキリスト信者としてのあり方を証言している。フィリピの教会は、パウロが自身の入信(回心)体験に基づいて福音を最も徹底的な主張で展開していた時期に、独自の宣教団の活動によって形成した教会である。その意味で、パウロ自身の自己表白を額面通りに受けとめてくれる数少ない教会であったと想像される。そこで、18節「キリストの十字架に敵対して歩んでいる者」と呼んで批判している者や、前段 2 節で「あの犬ども」と呼んでいる者も、パウロが「ガラテヤ書」で批判している者たちのことと推認されるが、彼らに対する批判は、「ローマ書」や「コリント書」では封印されている。

・13~14 節のように、キリスト者としての生き方を陸上競技に譬える例は、「ヘブライ書」12 章などにも見られる。フィリピは、ギリシア文化の周縁地マケドニアに位置し、古代オリンピック文化は身近に知られていた。

福音書日課(ヨハネ 17 章より)

・日課箇所は、主イエスが十字架にかけられる前の晩、弟子たちとの最後の食事を終えた後に、「キドロン谷の向こう」(18:1)すなわちオリーブ山に向かわれる途上で祈られたとされ、一般に「大祭司イエスの祈り」と呼ばれる祈りの後半部。おそらく、共観福音書における「ゲッセマネの祈り」と同じ伝承系譜に属するものだが、「ヨハネ福音書」の編集意図に基づいて、逮捕される地に入る前の場面の中に組み込まれ、また民のために執り成し祈る「大祭司」的な要素を明確にしたものとしてまとめられた、と考えられる。

・イエスを旧約正典「律法」が規定する「大祭司」に類する者と位置づけるキリスト論は、「ヘブライ書」で明確に認められるが、他の新約文書では明らかでない。「ヨハネ福音書」は、共観福音書やパウロ書簡集の「キリスト論」を基軸としつつ、それに「大祭司キリスト論」を上乗せして組み込もうと意図しているとみられる。・「大祭司イエスの祈り」は、三部構成で展開し、第一に父である神と子である自身に関すること、第二に子を通して父と結ばれる弟子たちのこと、第三に弟子たちを通して父と子と弟子たちの交わりに加えられる者たちのことを、取り上げている。ここに、「ヨハネ福音書」の信仰共同体論が提示されていると言える。

来週の誕生日 (10月20日～26日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-127「み恵みあふれる」は、19 世紀フィンランド・ルーテル教会信徒でフィンランド文学の教授クロンが自らも携わった讃美歌集に収録した讃美歌。曲は、フィンランドの伝統旋律から採られた。WCC の 1974 年版讃美歌集に採用されて広まった。
- ・21-385「花彩る春を」は、『讃美歌 21』編纂に当たって公募採用された日本人作詞作曲の讃美歌。作詞の上島美枝は、松山教会のオルガニストで、当初父親が作曲した曲との組み合わせで応募した。曲は、教会音楽家で合唱指導者・作曲家の高浪晋一が、この歌詞に合わせて作曲。
- ・21-460「やさしき道しるべの」(= I 288「たえなるみちするべの」)は、19 世紀英国教会司祭からオクスフォード運動を経てカトリック司祭に転じ晩年は枢機卿にも任じられた、当代随一の説教家としても知られるジョン・ヘンリー・ニューマンが、32 歳で病気から回復した際に心境を記したとされる詩を、讃美歌編纂者が讃美歌用に採用した歌詞。後に、同時代の英国教会司祭で教会音楽家としても多数の作曲をしたジョン・B・ダイクが、この歌詞のために作曲したところ、広く歌われるようになった。
- ・21-528 番「あなたの道を」(= I 280 番)は、17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家パウル・ゲアハルトが詩編 37:5 から着想して作詞した 12 節の讃美歌詞に、18 世紀ドイツの作曲家 J.M.ハイドンの曲が組み合わせられているが、現行のドイツ語讃美歌では別の曲と組み合わせられている。ジョン・ウェスレーの英

訳詞(Give to the Winds Thy fears)によって、英語讃美歌集でも歌い継がれている。

21-127「み恵みあふれる」

Herrasta Veissa Kieleni

English Translation

O sing my soul, your Maker's praise

1. O sing my soul, your Maker's praise / In grateful hymns ascending; / Whose steadfast love has crowned your days / With heav'nly gifts un ending. / I sought the Lord, He heard my cry; / His holy angels hover nigh / The tents of those who love Him.
2. The Lord is good to those who seek / His face in time of sorrow, / Providing comfort to the weak / And grace for each tomorrow. / Though grief may tarry for a night, / The morn shall break in joy and light / With blessings from His presence.
3. The Lord will turn His face in peace / When troubled souls draw near Him; / His loving kindness shall not cease / To those who trust and fear Him. / Our God will not forsake His own; / Eternal is His heav'nly throne; / His kingdom stands forever.

21-460「やさしき道しるべの」

Lead kindly Light, amid the encircling gloom

[Refrain] Lead, kindly Light, amid the gloom of evening. / Lord, lead me on! Lord, lead me on! / On through the night! On to your radiance! / Lead, kindly Light! / Lead, kindly Light, kindly Light!

1. The night is dark, and I am far from home, / Direct my feet; I do not ask to see / The distant scene; one step enough for me. / So lead me onward, Lord, and hear my plea.
2. Not always thus, I seldom looked for you, / I loved to choose and seek my path alone. / In spite of fear, my pride controlled my will, / Remember not my past, but lead me still.
3. So long your pow'r has blest me on the way, / And still it leads, past hill and storm and night! / And with the morn, those angel faces smile, / Which I have loved long since, and lost a while.

21-528「あなたの道を」

Befiehl du deine Wege

英語版 Give to The Winds Thy Fears

- 1 Give to the winds thy fears, / hope and be undismayed; / God hears thy sighs and counts thy tears; / God shall lift up thy head. / Through waves and clouds and storms, / He gently clears the way; / wait thou His time, so shall this night / soon end in joyous day.
- 2 Still heavy is thy heart, / still sink thy spirits down? / Cast off the weight, let fear depart, / and ev'ry care be gone. / What though thou rulest not, / yet heav'n, and earth, and hell / proclaim, God sitteth on the throne, / and ruleth all things well.
- 3 Leave to His sov'reign sway / to choose and to command, / so shalt thou wond'ring own His way, / how wise, how strong His hand! / Far, far above thy thought / His counsel shall appear, / when fully He the work hath wrought, / that caused thy needless fear.
- 4 Thou seest our weakness, Lord, / our hearts are known to Thee; / O lift Thou up the sinking heart, / confirm the feeble knee. / Let us in life, in death, / Thy steadfast truth declare, / and publish with our latest breath / Thy love and guardian care.